

パラスポーツを通じた他者理解と共生

田中彰吾

(東海大学)

1. 河合純一氏との出会い

ある出会いの経験を現象学的に記述することから本稿を始めようと思う。2023年8月にパラリンピック研究会で講演する機会をいただいた。「パラスポーツを通じた他者理解と共生社会」というタイトルで、パラスポーツについては素人ながら自分なりの考えを披露させていただいた。その際、講演後のディスカッションに応じてくださったのが日本パラリンピック委員会委員長を務める河合純一氏だった。

読者には周知のことと思われるが、河合氏は全盲の元競泳選手である。全盲の方と話をすること自体私には初めての経験だったのだが、それを通じていくつか新鮮な気づきを得た。ワークショップが始まる前、河合氏はICレコーダーに耳を傾けて何か音声を聴いていた。私にも聞こえるぐらいの音量だったのでほんやりと関心を向けていたところ、「よろしく願いいたします」「お世話になっております」といったEメールの定型文のような音声が早回しの速度で耳に入ってきた。あ、そうか、彼はメールを視覚的に読むのではなくこうして聴覚的に読むのか、とその場で気がついた。後で本人に確認したら、やはりそうだった。それで興味を持って「では返信も音声入力ですか？」と質問したところ、それにもやはり「そうです」という答えが返ってきた。

目が見える私にとって、このような場面に遭遇するのはとても新鮮なことだった。メールを耳で読むというのはどういう経験なのだろう。おそらくAIの読み上げ機能を利用しているのだろうが、その機械的な話し方に干渉されて内容が頭に入って来ないということはないのだろうか。あるいは、AIの声とメール送信者のジェンダーがずれていたり、実際の送信者の声質・ボリューム・声の高低などの特徴とAI音声が不一致だったりして、違和感が生じることはないのだろうか。その場で河合氏本人に尋ねられるほど明瞭に考えていたわけではなかったのだが、講演を始める直前の短い初対面の合間に、こういった疑問をうまく言葉にできないまま考えていた。

また、講演後のディスカッションの時間を通じて、河合氏の身体が私の声に鋭敏に反応していることがよくわかった。彼の体は私の声に反応して軽く向きを変える。ご自身で考えて発話する時間帯は正面にあるマイクに向かって話しているのだが、彼の90度左隣に座っている私が話す際には、彼の上半身は私のほうに正面を向けかえる。聞こえる音を空間的に定位し、それに対して正面になるよう顔と上体の向きをそのつど整えているのが私にも理解できた。逆に自分自身がそうした向きの調整をしないのはなぜなのかと考えさせられたが、それはおそらく、話している最中の対話相手がつねに私の視野に入っており、そちらに上半身を向けなくても「相手に向き合っている感じ」がすでにしているからだった。

河合氏がするように私も彼の正面に身体の向きを変えることは、私にとっては最初、過度に相手に向き合う感じがして少し抵抗があった。だが、ディスカッションが15分ほど経過する頃には、自己の身体が彼の身体につられて、次第に発話と聴取のたびに微妙に上体の向きを調整するようになっていた。相手の身体を「見る」のではなく、相手の発話を「聴く」ことを中心に自己自身の対応の仕方を変化させるとこのような身体性を経験できるのか、と感じて興味深かった。いつもは明確に気づいていない声の空間性に自己身体をなじませ、正面から全身で相手の声を浴びるような経験だった。

いま私はこの文章を書きながら、「聞く」と「聴く」を使い分けている。「聞く」は文字の意味からすると「門」を示す二つの扉のあいだに「耳」がある状態である。喩えるなら、家の入口の合間から入ってきた物音が「聞こえる」という事態に近い。実際、辞典によると「聞」の訓読みには「聞く」だけでなく「聞こえる」も挙げられている（漢字辞典オンライン）。他方、「聴く」は「耳」と「憲」（徳）から成る文字である。「憲」の字に「心」が入っていることから窺えるように、これは「正しい心」を持って耳を使う、いわば人の話を深く傾聴する状態である。訓読みに「聴こえる」はなく、むしろ古くは「聴す（ゆるす）」と読まれていた（同様に漢字辞典オンライン）。心をもって相手の話を傾聴することが、相手の存在をゆるし受け入れることを意味していたのである。河合氏と議論する私にどれほどの「憲」が備わっていたか定かではないが、相手の声に注意を払いつつ意図して「聴く」ことを実践していたのは確かである。

ディスカッションが終わる頃には、「話す－聴く」を全身で実感しつつ経験していた。そして、人の声というものがこれほど身体に響くものであるのか、という驚きと衝撃を体感していた。当然ながら、ひとの声は言葉と共に意味を運んでくる。河合氏と議論しながら、私はいつもより言葉の意味をひとつひとつ確かめるように「聴き」、そして体内でいちど響いた相手の声を受けて、こんどは自分の中から自ずと湧いてくる言葉を正面から相手に返すという作業を続けていた。「共鳴」はもともと音声は響き渡る経験を

起源とする概念であろうが、当日の私の経験は文字通り「共鳴」することそのものだった。聴くことがもたらす身体間の共鳴。それが河合氏との議論を通じて私の身体に生じたことである。哲学者の鷲田清一（2015）は、哲学が自己内対話（モノローグ）ではなく相手の話を「聴く」ことから始まるダイアログであるべきだと主張している。その意味で言うなら、河合氏とのディスカッションは私にとってまさに「哲学する」経験であった。

ところで、以上の経験の内容はどこまで私自身に由来し、どこから河合氏に由来するのだろうか。もちろんここに記述したことはすべて私自身の一人称のパースペクティブに与えられた事象ではあるが、河合氏の身体が私の身体と対になることで初めて成立したことでもある（以下で見る通り、この「対になる」は哲学者フッサールの他者論に特有の表現である）。彼が私の前に存在していることで与えられた経験であるとともに、相手としての私が彼の前に存在することで生じたものでもある。このとき生じた経験の内容は、以下の議論で明らかになる通り、私と彼のどちらかに帰属させられるものではない。どちらが欠けても成立しなかった経験であるし、どちらかだけに由来するものでもない。精神科医であり哲学者でもあった木村敏（2005）の言葉を借りるなら、二人の「あいだ」で成立していた事態として捉える必要がある。

この経験の約4ヶ月後、こんどは所属先の東海大学で開かれたシンポジウムで講演する機会を得た。それは、「見る」ことではなく「触れる」ことから作品展示を組み替えるユニバーサル・ミュージアムの意義を問う趣旨のシンポジウムで、私自身は触覚の意義を再考するための話題を提供した。そちらには全盲の文化人類学者である広瀬浩二郎氏（国立民族学博物館）と、同じく20代で失明してからも長く高校教員として活動された経歴を持つ栗川治氏（立命館大学大学院）がパネリストとして招聘されていた。これら二つのイベントは独立に企画されたものだったため、私にとっては期せずして視覚障害者との出会いを短い期間に続けて経験できる機会となった。

彼ら二人との出会いもまた、私にとってはとても興味深いものだった。記すと長くなるので本稿では省略するが、河合氏との出会いと同様に「音声の空間性」に自己身体を通じて参入する経験は共通している一方で、広瀬氏、栗川氏のコミュニケーションのスタイルはそれぞれ違った個性を反映しており、私の身体に生じた経験は河合氏との出会いを通じて生じたそれとはまた違った種々の発見を伴っていた。やはり、出会いの中で経験されることは、その経験に参加している当事者が誰であるかによって変化するのであり、一見すると主観的に見える個々の経験もまた、参加する当事者の「あいだ」で生成していると捉える必要があると言える。

2. ゴールボールを観戦する

以上に記した通り、河合氏、広瀬氏、栗川氏との出会いを通じて、さまざまな身体障害の中でもとりわけ視覚障害に筆者は深く関心を寄せるようになった。そのため、先に開催された2024年のパリパラリンピックでも、視覚障害者が参加する競技を中心に多くの競技を観戦した。ここでは、日本チームの優勝に終わった男子ゴールボールの決勝戦を観戦した際の私自身の経験について、現象学的に記述しておきたい。というのも、この競技を観戦した際、選手自身の「見える」経験と「見えない」経験が深く絡み合っただけでなく、プレーが成立しているように見受けられ、深く興味を惹かれたからである。

ゴールボールは、視覚特別支援学校などで実践されている視覚障害者向け競技である。専用ボールはほぼバスケットボールと同サイズだが重量がその2倍で素材も硬いため、バスケットボールのように高く跳ね上がることはない。ボールの中に鈴が2個入っており、その音を聴覚的な手がかりとして選手はボールの位置を捉えつつプレーする。選手の視覚障害の程度はさまざまであり、選手間の条件を等しくするため、競技中は目にアイパッチを貼り、さらにアイシェード（ゴーグルの一種）を装着して完全に光を遮断する。コートは縦18m、横9mで、自陣と敵陣の奥行きはともに9mである（バレーボールのコートと同じ広さ）。ゴールは高さ1.3mで幅9mなので、コートの横幅いっぱいにゴールポストが広がっていることになる。ポストの高さは直立する選手の背中の高さにあたる。また、コート自陣のポスト近くには太さ3mmの風糸が指標となるラインに沿ってテープで貼られており、これに触れることで選手は自己の位置をコート内に位置づけられるよう工夫されている（日本パラスポーツ協会、2022）。

競技内容は比較的単純である（競技経験が単純だという意味ではない）。チームは3人で構成され、一方のチームの一人が他方のチームに向かってボールを投げ、それがゴールに入れば1点が投球側のチームに加算される。ボールを受ける側は、3人でうまく自陣内に身体を広げて幅9mのゴールにボールが入らないようディフェンスする。図1のように、コート上で身体を横に伸ばして距離を稼ぎ、ボールの侵入を防ぐようなプレーの仕方である。

競技の説明はこのくらいにして、私自身の観戦経験を記述しよう。私が観戦したのは日本代表対ウクライナ代表の決勝戦である。決勝まで進むとテレビで放映される時間が長くなるため、じっくり観戦するにはちょうど良い機会だった。ただ、この時は選手個々の背景や障害を十分に知らないまま、解説者の説明から理解した程度の状態で競技を見ていた。観戦し始めた当初のざっくりとした印象はこのようなものだった——光を



図1 ゴールボール（出典：パラサポ WEB）

遮断されまったく見えない状態でプレーしている選手たちが、なぜこれほど正確にボールの位置を知り、腕や脚を的確に使ってボールをブロックし、パスされたボールをうまくつかみ、方向を間違えずに投げることができるのだろうか。これらひとつひとつの場面への驚きと素朴な疑問だった。

ただ、見ているうちに当初の驚きは薄れてくる。しだいに観戦する私の目が少しずつ慣れてきて、いくつかははっきりと理解できたこともあった。例えば、(a) 投球者は投球する前にコート内での自分の立ち位置を、ゴールポストに背中と手で触れることできかなり正確に把握していること、(b) 投球前に全身を一回転させて速度をつけてボールを投げる場合、身体の回転速度の微妙なコントロールに失敗すると投球方向がコート外へ大きく逸れること、(c) ボールがバウンドするさいの時間間隔（例えば「トン、トン」なのか「ト、トン」なのか）は、ボールがどのくらいの速度で自陣に近づいているかを判断する重要な音声の指標になっていそうだという事、(d) また、同じ時間間隔は、自陣でボールを受ける場合にどのくらいの高さまで脚や腕を上げてボールを止めるか、バウンドしたボールの高さを判断する指標にもなっていそうだという事。

私の目がこのように慣れてくる頃、日本チームが金子和也選手のゴールで先取点を取った。それもあって、ここからは冷静に見るよりも試合の流れそのものに引き込まれ始めた。私はもちろん日本チームを応援しながら見ている。日本側がボールを投げる際には相手のディフェンスが崩れるのを期待しながら、逆にウクライナ側がボールを投げる際には、日本側のディフェンスが持ちこたえてくれるのを希望しながら見ている。ボールの往復を見ているうちに、投球スタイルに特有のボールのバウンドのしかたが私の身体にもリズムを通じて伝わってくる。もっとも、私は目に頼って見ているので、

ディフェンスする選手の身体の反応の微妙な遅さを感じてもいた（以下で見る通り、視覚による対象の定位は聴覚によるそれよりも速いからである）。その一方で、聴覚的な音源定位だけに頼ってこれだけ素早くボールの位置を特定できるその能力の高さに驚かされもした。

試合展開も目を離せなかった。前半が終わった時点で2対2の同点、後半早い段階で佐野優人選手が3点目のゴールを決めたが、残り時間2分を切るところでウクライナに同点に追いつかれた。ゲームはそのままゴールデンゴール方式の延長線に突入し、開始2分弱の時点で再び佐野選手がゴールを決めて日本チームが勝利するという劇的な展開だった。最後、佐野選手の放ったボールが相手選手の脚に当たって高く跳ね上がってバウンドし、ずっとゴールに吸い込まれた様子がなんとも印象的だった。ボールの跳ね上がり方に、佐野選手の放ったボールの力強さとスピンの強さを、そしてその一投球に込められた思いの強さを感じた瞬間だった。

終了後、試合中のさまざまなプレーを思い返してみると、選手たちのボール捌きの巧みさに対する驚きが依然として残っていた。微妙な遅れを伴っているものの、接近してくるボールへの手の伸ばし方、その速度と方向がきわめて的確なのである。そこで、試合後に公開された動画を見ながら、テレビ放映での観戦経験を追体験してみた（Paralympic Games, 2024）。最初に理解できたのは、試合開始前のウォーミングアップ場面で選手たちがじつに自由にボールを操っているということだった。アイシェードやアイパッチを装着していない状態では、ほぼボールの動きが「見える」のに近い状態でプレーができていのように感じられる。選手たちには視覚障害がもちろんあるのだが、画面越しに見る限り、そのことには気づかないぐらい自然なプレーである。

不思議に思って、選手たちの視覚障害の程度について改めて代表選手たちのプロフィールを確認してみた。決勝でプレーした5人の選手のうち、佐野優人氏、萩原直輝氏、金子和也氏は、それぞれ発症年齢は異なるもののレーベル遺伝性視神経症であるとのことだった。高井ら（2024）の総説によると、レーベル遺伝性視神経症の発症後は極端な視力低下が生じて視野中心に暗点が伴い、視力低下が著しい場合には中心部30度以上が暗点となる場合もあるという。また、田口侑治氏、宮食行次氏は、2人とも10歳前後で網膜色素変性症を発症した経歴を持つとのことである。網膜色素変性症も視力低下を伴うが、見え方の変化としてはレーベル視神経症とは逆に、網膜中の杆体細胞が損傷して周辺視野が見えなくなったり、暗所では視力がほとんど働かなくなる症状を呈するという（松尾, 2023）。

いずれも大変な症状であるには違いない。ただ、こうした症状だとすると、中心視野を失うか周辺視野を失うかという違いが選手間にはあるものの、おそらく発症以降の過

程で、視野を部分的に失うことに慣れていく経験があったものと思われる。視覚障害を発症する以前の選手たちには、ボールのように動きのある対象もはっきり見えていたであろう。レーベル遺伝性視神経症を有する佐野選手、萩原選手、金子選手は、おそらく、周辺視野から中心暗点へと向かう動きの情報をうまく利用し、暗点内部にボールが入っているときにはその動きを補うかのようにして予測するスキルを高度に働かせていると思われる。他方、網膜色素変性症を有する田口選手、宮色選手は逆に、ボールが周辺視野へと逸れていかないように、できるだけ中心視野にボールを収めておくよう、眼球と頭部の動きを工夫するような身体運動のスキルをやはり高度に働かせているものと思われる。

私がこのように理解したのには理由がある。ウォーミングアップ中に選手たちがボールを扱うさいの手と腕の動きは、試合中に比べて、見ていてまったく遅延を感じさせないものだったからである。先述した通り、試合を観戦していた際、ディフェンスする選手の身体の反応が微妙に遅いように私には感じられていた。だがウォーミングアップ中の選手たちの動きにはこの微妙な遅れをまったく感じないのである。アイシェードをしない状態では、ボールの動きは視覚を通じてある程度捉えることができしており、視覚情報に身体運動を連動させることで、いわゆる「視覚-運動協調」(安部川, 2021)を基本としてボールを扱っているようなのである。このことは、近づいてくるボールを捕捉する手の動きが試合中よりも素早く円滑であることによく表出しているように思われる。

視覚を手がかりにしてボールを定位する場合と、視覚に依存せず他の感覚を手がかりにしてボールを定位する場合とでは、「どこからどこへ、どのくらいの速さで」という運動方向と速度の予測の仕方が異なってくる。視覚は光の刺激を受容する感覚モダリティであるため、刺激の伝達速度が他のモダリティに比べてより速い(ヘーゲレ, 2023)。映像から確認する限り、試合前の選手は残存する視覚をある程度使いながら「視覚-運動協調」を通じてボールを扱っているようなのだが、試合が始まると視覚を用いることなく「聴覚-運動協調」に切り替えてボールを扱っているように思われる。

以上を考えると、ゴールボールをプレーする日本代表選手たちの身体的スキルの高度さが改めて理解できるのではないだろうか。彼らは単に「視覚障害」と呼ばれる身体障害を生きているのではない。障害があってもかすかに残存する「見る」能力を用いてボールを扱う運動能力を磨いているとともに、試合になるとこんどは「聴く」能力を主に用いてボールを扱う運動能力を発揮しているのである。健常者の場合には「視覚・聴覚-運動協調」が漫然と一体化したままであるのに対して、ゴールボールの選手たちは「視覚-運動協調」と「聴覚-運動協調」とを弁別し、どちらも高度な水準に保って使

い分けるといふスキルを發揮しているということなのである。さらに言うなら、「見える状態でのプレー」と「見えない状態でのプレー」を往復できる能力を持っているということであろう。

3. 間身体性という方法

このような記述が決して単に筆者の主観に閉ざされた記述ではないことをここで明確にしておこう。現象学的身体論の草分けとして知られるフランスの哲学者のM・メルロ＝ポンティ(1960)は、「間身体性(仏 *intercorporéité*, 英 *intercorporeality*)」という概念を提起している。間身体性とは、自己と他者が互いの身体を知覚できる場面で顕在化するような、相互的・循環的な関係性のことを指す。例えば、子どもが満面の笑みを浮かべているのを見て思わず自分も微笑んだり、自分があくびをしたのにつられて友人があくびをするような現象がある。これらの例では、他者の行為を知覚することが自己の身体において同じ行為を喚起し、逆に、自己の行為が他者の身体において同じ行為を喚起している。

もちろん、他者のある行為を知覚しても同じ行為が顕在化しない場合もある。道端でつまずいて転んだ人をたまたま見かけたときに自己の体内で瞬間的に緊張が走るような場合、自分も転倒したかのような緊張を体内で経験してはいても、実際に転倒する行為を自己が反復するわけではない。つまり、間身体性は同じ行為が顕在化する場面だけでなく、同じ行為の可能性が喚起される場合も含んでいる。間身体性とは、このように、自他の身体間において知覚と行為(およびその可能性)が循環的に連鎖する相互的關係

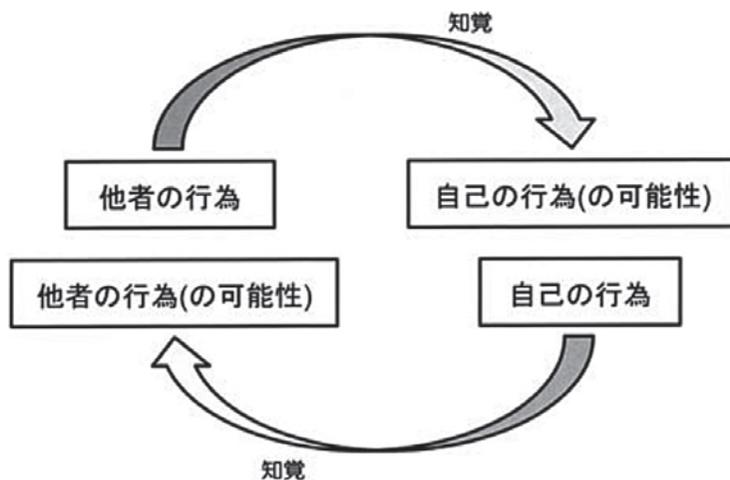


図1 間身体性の構造 (Tanaka, 2015, p.463)

性のことを言うのである（図1）。

メルロ＝ポンティがこのような現象に着目した理由は、哲学における他我問題の解決を目指していたからである。他我問題とは、簡潔に言うと、他者の心的状態を理解することは可能か、可能であるとすればいかにしてか、ということをめぐる問題である。この種の哲学的な問題意識を持たずに日常生活を送る私たちでも、時に「他人の考えていることは結局わからない」とか「友人のことを理解できているつもりでいたがよく話し合ってみたらまったく理解していなかったことに気づいた」といった場面に遭遇することがある。他我問題とは言わば、このような場面から遡った時に現れる、「もともと他者の心は理解できないのではないか」という問いかけに発する問題である。

特に、近代以降の哲学はデカルト（1637）が定式化した「われ思う、ゆえにわれあり」という自己意識から出発する観念論的な傾向を強く持っている。心身二元論に立つデカルトの考えでは、「われ思う」という自己意識は「精神」の作用であり、物理的次元に拡がり公共的な観察が可能な「身体」とは異なる次元にある。それゆえ、「われ思う」が私秘的で自己自身の精神の内部に閉じているとすると、その事情はおそらく他者の側においても同じであり、他者の意識や心的経験には接近しようがないということになるだろう。こうして、自己意識から出発する近代哲学は独我論に接近する傾向を持つことになる。これを受けて、近代哲学を乗り越えようとする現代哲学の文脈では、他者の心や他者の意識にどのように迫りうるのかということが哲学上の問題として問われるようになった経緯がある。

現象学の始祖であるフッサールは『デカルト的省察』（1950）において他我問題に取り組み、そこで自己と他者が身体を介して出会う場面を問題にしている（この出合いを記述するキーワードが冒頭で述べた「対になる（独 Paarung, 英 pairing）」である）。フッサールの考察はその後現象学内部でもさまざまな批判を受けることになるが、この点についてはここでは立ち入らない。むしろここで言及しておきたいのは、メルロ＝ポンティがフッサールの試みに含まれていた「身体」という論点を発展させて「間身体性」という概念を提示したことである（Merleau-Ponty, 1960）。メルロ＝ポンティはフッサールの着想を発展させ、他者の身体を知覚する場面を他者理解の出発点に据える。生活世界で出会う他者の身体は、さまざまな対象に向かって働きかける行為の主体として私には現れてくる。しかも私が知覚する他者の身体は、行為に伴う「意図」という特定の心的状態を含んでいる。例えば、他者がコップに向かって手を伸ばす行為を知覚する場面では、「水を飲む」という意図が同時にかつ直接的に把握される。それは身体と切り離された「精神」の中に仮定されるものではない。

メルロ＝ポンティは間身体性の概念を提示する以前から、『知覚の現象学』（1945）の

段階でも生後15ヶ月の赤ちゃんが見せる模倣の能力に着目している。赤ちゃんの前にいる大人が戯れて赤ちゃんの指をつかみ、自分の口を開いて噛むふりをすると、それを見た赤ちゃんはそれを模倣して口を開く。つまり、他者がする「噛む」という行為を見て、それを自己の身体の側でも同じ「噛む」行為として共鳴的に反復するのである。この現象を指してメルロ＝ポンティは、「彼（赤ちゃん）は彼自身の意図をその身体において知覚し、彼の身体と対にして私の身体を知覚し、それにより、私の意図を彼の身体において知覚するのである」（Merleau-Ponty, 1945, p.404）と述べている。

もっとも、この年齢の赤ちゃんは、単に大人の行為を無意識的に模倣しているだけで、行為にともなう意図を知覚できてはいないだろうとの指摘もありうる。だが重要なのは、こうした無意識的な模倣の能力が私たちに発達初期から備わっているというその事実なのである。他者の身体を通じて表出する行為は、自己の身体において同じ行為を引き起こす。このような感覚運動的回路における自他の共鳴が最初から私たちに備わっているからこそ、その後の成長の過程を通じて、他者の行為に備わる意図をまさに感覚運動的次元での共鳴をもとにして知覚的に理解することができるのである。他者理解の根源にあるものは、認知的操作ではなく感覚運動的過程と知覚的過程である。

さらに言うと、発達的に見てもこの見解には根拠があることが近年示されている。赤ちゃんは生後10～11ヶ月になると、大人の連続的な動きを見て、そこで実現されている「物をつかむ」「落とした物を拾う」といった個別の行為の意図に沿って分節しつつ他者を知覚できるようになる（Baldwin, Baird, Saylor & Clark, 2001）。また、14ヶ月児を対象とした実験では、大人が物を落として手が届かない様子を見せると、それを見た幼児が拾って大人に手渡す、という援助行為が観察される（Warneken & Tomasello, 2007）。大人が「何をしたいのか」という意図を理解して相互作用できるようになるのである。メルロ＝ポンティが観察した15ヶ月の赤ちゃんは「噛むふり」（偽装された意図）までは理解できなかったかもしれないが、少なくとも「噛もうとする」意図については理解していたであろう。

哲学的に見ると、フッサールからメルロ＝ポンティへと続く議論は、20世紀初頭まで有力だった「類推説」と呼ばれる他我問題の理解を乗り越えるものになっている。類推説は、ひとが他者の心的状態を理解できることの根拠として、心身間の類比的関係から推測することを重視する。自己自身の経験に基づいて、「私」は悲しいと感じれば涙を流し、楽しいと感じるときには笑顔になることを知っている。「私」の心的状態は、そのつど身体的変化として表出する。私が経験してきたこのような心身の関係性を他者もまた生きているとするなら、涙を流している他者は「悲しい」という心的状態、笑っている他者は「楽しい」という心的状態にあることが推測できるだろう。このように、自己

についての心と身体を類比的に他者にも適用し、観察可能な他者の身体的状態にもとづいて推論することで他者の心的状態を理解することができる、という考え方を類推説と呼ぶ (Gallagher & Zahavi, 2012, p.201)。

また、現象学における以上の議論は、心理学および認知科学における議論との対応関係で言うと、1980年代から展開してきた社会的認知における「心の理論説」および「シミュレーション説」とともに乗り越える試みとなっている (Tanaka, 2015)。心の理論説では、発達の過程で他者とのやり取りを通じて学習される心的状態に関する常識的理解 (これを「心の理論」と呼ぶ) を他者に当てはめることで、ひとは他者の心的状態を推論的に理解するものである、と考える (例えば Doherty, 2008)。他方、シミュレーション説では、自己自身の経験に由来する心的状態を他者に置き換え、現状の他者ならばおそらくこのように感じ、考えているだろうという模擬 (シミュレーション) を想像的に実践することで他者の心的状態を理解する、と考える (例えば Goldman, 2008)。やや強引に要約すると、自己にも他者にも該当する法則的知識を用いる三人称的で推論的理解が他者理解を構成すると考えるのが「心の理論説」であるのに対し、自己に由来する心のモデルを他者に置き換えるという一人称的な想像的实践が他者理解を構成すると考えるのが「シミュレーション説」であると言える (Tanaka, 2015, 2017)。

現実には私たちが経験する他者理解は、類推によって説明できるように見える場合も、心の理論やシミュレーションによって説明できるように見える場合もあるだろう。ただ、これらの学説はいずれも、最初から心と身体を切り離す立場に立っていることが問題である。類推説は、観察できる他者の身体の背後に観察できない他者の心を仮定している。心の理論説とシミュレーション説はいずれも、他者の心は自己から直接アクセスできないため、両者を架橋するための特別なメカニズムとして「心の理論」や「シミュレーション」が必要であるとの発想に立っている。そして直接アクセスできないのは、類推説と同様に他者の心は公共的には観察できないと想定しているからである。

だが、間身体性の立場からすれば、こうした理解がそもそも自己と他者の関係についての誤解に基づいている。他者の身体は、自己の心と他者の心を分断する壁や溝のようなものではなく、むしろ、自己の心と他者の心を感覚運動的な次元を通じて結ぶ接着剤である。他者の身体に生じていることは、感覚運動的次元において自己の身体で反復されることで、その意図や情動を伝えてくる。逆に、自己の身体で生じていることは、感覚運動的次元を通じて、他者の身体において同じ過程を表出させるような関係にある。メルロ＝ポンティによる間身体性の概念は、たんに哲学上の議論にとどまるものではなく、心理学的で経験的な次元での社会的認知や他者理解の問題までを一貫して扱おうとする概念だったと言える。

4. 他者を理解するとはどういうことか

メルロ＝ポンティによる間身体性の概念を受けて、他我問題を仕切り直してみよう。ここでの重要な論点は、心身二元論の前提を離れて自己と他者の出会いのあり方を捉え直すことにある。さらに言うと、他我問題を単に「いかにして他者の心的状態を理解できるか」とするのではなく「いかにして他者の心身全体の状態を理解できるか」と問い直すことにある。冒頭で記述した河合氏との出会いをここで思い出してもらおうと、私たちが日常生活の中で経験する他者との出会いには次のような三つの特徴があることがわかるだろう（田中，2022a, pp.125ff）。

第一に、私たちが経験する他者との出会いは、三人称的な推論的理解や一人称の想像的实践である以前に、互いの関与によって始まる二人称的な相互作用である。この相互作用にはもちろん言葉のやり取りも含まれるが、最も基礎的な意味における相互作用は、互いの行為と応答行為を通じて展開する相互行為であることに特徴がある。発話能力がまだ十分でない乳幼児とやり取りする場面を思い浮かべるとわかりやすい。子どもがどこかを指させば、私はそちらの方向を見るだろう。私が遠くのコップに手を伸ばして届かないふりをすれば、子どもはそれを取って渡してくれるかもしれない。互いに言葉を発しなかったとしても、私たちは他者の身体の挙動を見るだけで、その相手の行為の意図を即座に理解しているし、その意図に応じて応答的行為を取っている。間身体性の概念が示唆している通り、最も基本的な他者理解は、他者が、ある意図を持った行為の主体として現れてくることに由来するのである。

第二に、日常的な状況で出会う他者は、目に見えない「内面」と目に見える「外面」のように、はっきり分離されたしかたで自己に対して現れてはこないということ。他者の笑顔はそのまま喜びとして、頬をつたう涙は悲しみとして、私には感じられる。その笑顔や涙が差し向けられた対象がわかっていればなおさら、そうした他者の身体表現がそのまま感情を表していることを知覚できるのであって、身体表現の向こう側に、それとは区別される「内面」や「心的領域」を類推しているわけではない。他者の心は、その身体とともに直接的に知覚しうるものなのである。この考え方は心の理論説やシミュレーション説に対置して「直接知覚説」と呼ばれる（Gallagher, 2008）。

ただし、日常的な実践において他者の心が身体の背後に隠されていて知覚できないような場面もある。相手が嘘をついている場合や、本音を隠そうとしている場合では、心は一時的に隠れている。だが、河野（2006, pp.105ff）が指摘しているように、このことは、原理上つねに他者の心が身体の背後に「内面」として分離して存在するということを意

味するわけではない。私たちは心を「内面」として理解する発想に慣れすぎてしまっていて、他者の心がもともと身体の背後に隠れていると想定してしまうが、そうではない。他者の心は場合によって身体の背後に隠れることがあるだけで、原理上は、身体とともに現れているのである。メルロ＝ポンティとともに確認した通り、日常的な社会的実践は、他者の心と身体を二元的に分離する地点から始まってはいない。

第三に、相互行為における他者の行為は、それ自体で単独に生じてくるわけではない。自己と他者は一定の社会的環境を共有しており、それを共通の文脈として利用することで、相互行為を行なっている。他者の行為はつねに社会的環境としての世界の中に埋め込まれている。単純な例をあげよう。遠くを見つめている他者の姿だけを単独で見たとしても、その人物の知覚世界は私には想像がつかない。だが、それが「バス停で列をなす人々」という社会的文脈に埋め込まれたものとして与えられれば、その人はバスを待っていて、バスが来るかどうかを気にしている、という心的状態をそこに即座に感じ取ることができるだろう。

相互作用の相手方である他者は、決して心と身体のみで出現するわけではなく、社会的環境を、さらには世界を背景として現れる。自己もまたその社会的環境に置かれており、相互行為が形成する文脈上で相手を知覚しているため、自己にとって他者の行為は、共有可能な意味のあるものとして理解できるということなのである。認知科学ではしばしば他者理解を「社会的認知」の一種に数えるが、ここでの「社会的」という言葉の意味は、自他関係の社会性という意味だけではなく、社会的文脈としての環境を含めて考えるべきである。

以上三つの特徴を備えつつ、ひとは他者の行為の意図やそこに表出されている感情に自然に応答しながら、行為と応答行為の循環として二人称の相互行為を展開していく。一方が何かを指差す→他方がそれを追視する、一方が物を手渡す→他方がそれを受け取る、一方が何かを見て表情を曇らせる→他方がそれにつられて表情を曇らせる、等の種々の身体的相互行為が展開することで、自己と他者とのあいだで特定の文脈が形成され、その文脈の中で言語的なメッセージが会話を通じてやり取りされる。

もちろん、言語を介した会話の場合も、いわゆる非言語的コミュニケーションとして知られる身体的なシグナルが多々含まれている。発話と沈黙のタイミング、うなずき、ジェスチャーを用いた発話の強調、会話時の身体の向きや身体間距離、アイコンタクト等である。これらもまた、言語的なメッセージのやり取りを水面下で支える重要な文脈を形成する。会話では、言語的メッセージと相互行為の文脈の不一致もときおり経験される。他者の言葉の意味が額面通りには理解できてもどこことなく釈然としない感じが残ったり、相手が本音を語っていないと感じられたりすることもあるだろう。こうした

経験は、身体レベルの相互行為と言語レベルの相互作用との微妙な齟齬を反映している。

このように、身体的相互行為が噛み合っ（時には不一致を含みつつ）進んでいくことで自他のあいだで相互理解が進行していく。二人称の相互行為が協調しつつ進行しながら生み出されるものを、フックスとデ・イエーガーは「エナクティブな間主観性」と呼んで次のように記述している（詳細な説明は省くが「エナクティブ」という言葉は「行為を通じて実現される」という意味合いで理解していただければよい）。

二人の個人がこのようなしかたで相互行為をするとき、身体動作、発声、ジェスチャー、視線などが協調するが、その協調が個人の意図を越えて共通の意味創造が創発するような瞬間に至る。このプロセスはシステムのレベルでは、社会的相互行為がそれ自体の自律性を獲得することとして記述されてきた。現象学的に言うと、これは、プロセスがそれ自身の「重心」を獲得することとして経験されるだろう。すなわち、「あいだ (in-between)」が、二人のパートナーの作動しつつある志向性の源泉となるのである。それぞれが、プロセスの外にいるときにそうするのは異なるしかたで行動した経験し、二人のどちらかに必ずしも帰属させえないしかたで意味が共同創造される。(Fuchs & De Jaeger, 2009, p.476)

記述がやや抽象的だが、具体例として、キャッチボールやテニスのラリーを思い浮かべるとわかりやすい。これらのやり取りでは、それが続いているあいだ、どちらか一方の意図だけで相互行為のプロセスを制御できない。自分が望む通りに相手が動いてくれるわけではないからだ。しかし、互いにやり取りを続けようとする意志があれば、相手に対応できそうな範囲にボールの軌道を調整し、自己の側でボールを止めずに一定の時間感覚でそれを相手へと返すことになる。このプロセスはパートナーの能力に制約されるため、異なる人物を相手にする場合とは違ったしかたで相互行為を続けざるをえない。そして、このような状態で相互行為が噛み合っ進行するとき、自己と他者の「あいだ」のプロセスが自律的に展開し始めるのである。言いかえると、自己と他者という二つの項を持つひとつのシステムが創発するということであり、システムに特有の「重心」との関係で、自己と他者のそのつどの行為が生じてくる。つまり、プロセスを円滑に進めるような行為へと一定の制約がかかった状態で二者が行為を継続するようになるのである。なお、フックスらが記述する「あいだ」の捉え方は、木村敏が記述する「あいだ」とよく呼応する (Tanaka, 2017)。

このような状態は、基本的には自己と他者が一定の対人協調を保ちながら相互行為を

形成している状態であるが、個別の行為がつねに協調的なものになるとは限らない。ボールのやり取りの例でも、相手のリズムカルな動作を崩すようにタイミングをずらしてみたり、相手に対応できるかどうかぎりぎりの場所にボールを返してみたり、相手に拮抗するような行為も生じうる。つまり、全体として相互行為のプロセスが一定の自律性を獲得しているとしても、そこには、相手と単純に同調するだけでなく、対抗したり、プロセスを支配しようとしたり、従属に甘んじたり、相手に応酬したり、といった種々の駆け引きが含まれるのである。そして、この種の駆け引きに含まれる相手の意図は、間主観的に十分に了解できる。私たちは、相手の行為にともなう意図を直接に知覚できるからである。

パラスポーツにおけるエナクティブな間主観性を示すひとつの事例として、ブラインドマラソンにおけるテザー（走者と伴走者が共に握る長さ50cmのロープ）を介した走者と伴走者のやり取りに言及しておきたい。作家の浅生鴨（2018）による小説『伴走者』はブラインドマラソンを取り上げた作品であり、テザーを介したランナー二人のやり取りが興味深い筆致で描かれている。ブラインドマラソンはキャッチボールのような場合とは違って、二人が協力して他チームに勝つことに目標がある。そこで、ブラインドランナーの走りを最速に導くことができるよう伴走者のテザーの使い方も工夫される。ただ、さまざまな工夫を通じて高度な信頼が間主観的に形成されるからこそ、給水時に互いの身体的位置を入れ替え、テザーを持ち帰る瞬間に関係が一瞬切れることが恐怖を生むという。小説中では次のように記述されている。

二人をつなぐロープを離し、淡島〔伴走者〕は内田〔走者〕の肘に触れた。伴走者は常にロープか手で選手につながっていなければならない。内田が素早くロープを左手に持ち替えるのを確認すると、淡島は後ろから内田の左側に回り込み、右手でロープを掴んだ。どれほどの信頼関係があろうとも、この僅かな瞬間、選手だけではなく伴走者の中にも恐怖が芽生える。一度生まれた恐怖は毒素のように全身を駆け巡り、冷たい汗とともに流し出されるまではしばらく消えない。（浅生、2018, p.36, 括弧内引用者）

ブラインドマラソンにおけるテザーを介した相互作用は、きわめて高度な二者システムを生み出している。選手も伴走者も、このシステムがあるからこそ自己を保つことができる状態にまで至っている。だからこそ、テザーを持ち替えることで二者システムを大きく調整せねばならない局面では、二人とも自己を保つことが難しいほどの恐怖に襲われ、その感情がしばらく消えない状態を経験するのである。

以上の通り、「あいだ」における二者システムの創発を通じて自他関係が進展することを考慮に入れると、もともと他我問題が想定していた「他者を理解すること」にまつわるイメージが大きく変わることだろう。他者を理解することは、自己と他者の二人称的な相互行為を通じてのみ成立するものであり、決して一方的なものではないし、どちらか一方のみに帰属するものでもない。相互行為が一定の対人協調を保ちながら自律的な「あいだ」のプロセスを展開する。そうして形成される「間」や「場」において知覚できる他者の行為や発言の意味を、やり取りを重ねるなかで明瞭に際立たせていく作業の中に他者理解があるのである。その本質は知覚的経験であって、推論や想像のような高次の認知的操作は二次的で補助的な役割しか果たしていない。理解の深まりとともに、出会いの当初は単に匿名的な「ひと」だった他者が、特定の「誰」という人格性を帯びた存在として人物像を鮮明に伴って現れてくる。他者を理解することは、他者の身体背後に隠れている心を理解するという経験ではない。間身体性に始まる知覚と行為の循環から自他の相互行為を展開し、さらに言葉のやり取りを重ねていく中で、相手の行為と発言の意味を理解し、他者がどのような人物であるのかをより深く捉えていく終わりなき過程なのである。

5. パラスポーツを通じた障害理解と共生

ここまでの考察を踏まえて、パラスポーツを通じて私たちに実践できる障害理解と共生のあり方について考えてみよう。

(1) 不一致から始まる理解：私自身が河合氏との出会いを通じて「話す－聴く」という共鳴を自ら経験した通り、障害のある身体に出会う場面がなければ、障害を理解することがそもそも可能にならない。私たちの身体には間身体性という独特の回路が潜在しているが、それが顕在化するには自己と他者が互いの身体を知覚し、行為を通じて関与し合うことが必要である。

もちろん、ある障害を伴う身体とそうでない身体が出会った場合に、最初から円滑に間身体性が顕在化してくることはない。河合氏と出会った際、彼がするように相手の正面に身体の向きを変えることは、過度に相手に向き合う感じがして私には最初しばらく抵抗があった。このような抵抗は、障害の種類と度合いに応じて互いの身体性に備わる差異が大きければ大きいほど、大きなものになるだろう。別の論考で東京パラリンピックの観戦経験を記したが（田中，2022b），両腕のない山田美幸選手が泳ぐ姿を最初に目にしたとき、筆者は当初、腕を動かさせないもどかしさを感じずにはいられなかった。

しかし、こうした抵抗やもどかしさこそ、自己とは異なる身体を持つ他者に出会うた

めに必要な不一致なのである。このような不一致が存在しない極限的な例として、鏡の前で動く場面を考えてみるといい。鏡の前で手を伸ばしたり上体を回転させたりすると、それとまったく同じタイミングで、こちら側で動いているのとまったく同じ仕方で鏡像も動くのが見える。ここでは、運動感覚を通じて経験される「こちら側の身体」と、視覚を通じて受容される「向こう側の身体」とのあいだに不一致がなく、ひとつの行為が存在するだけであり、こちら側の身体と向こう側の身体とのあいだに相互行為が成立しない。そして相互行為が成立しないがゆえに、間身体性も顕在化することができないのである。たいていの動物は鏡に出会うと、最初は他個体が映っているものと思って興奮するが、相互行為が成立しないことに気づくとやがて鏡像に関心を示さなくなる。

逆に、どれだけ円滑に間身体性が発露しているように見えても、間身体性が顕在化してくるためには、自己の身体と他者の身体との間に、身体運動のパターンと時間性をめぐって微細な不一致がなくてはならない。この不一致は、身体に障害があるかどうかにかかわらず、およそ複数の身体が存在するところには必ず存在し、そこから間身体性が顕在化してくるための条件として機能しているのである。

異なる障害を持つ身体が出会う場面や、明確な障害がある身体とない身体が出会う場面では、間身体性が顕在化してくるうえで必要となる身体性の不一致が通常の出会いに比べて相対的に大きい。だが、その不一致があるからこそ、間身体性が両者のあいだに顕在化してくる可能性があるということでもある。自他の身体性の不一致こそは、他者の障害を正確に理解するための最初の一歩である。そして、この不一致をむしろ「てこ」のように使うことで相互行為を推進する作用に変えていくプロセスの中にこそ、障害を理解する営みがある。

(2) 間身体性の顕在化を促すパラスポーツ：私たちには、感覚運動的次元で他者に共鳴する間身体性の回路がおそらく生得的に備わっている。赤ちゃん研究の古典が示している通り、生後間もない新生児も大人が見せる特定の表情を模倣することができるし (Meltzoff & Moore, 1977)、新生児のグループは誰か一人が泣き始めるといわゆる「伝染泣き」の現象をしばしば示す (Simner, 1971)。

だが、新生児の段階ではいわば全方位の他者に向かって開かれているこのような回路も、成人する頃には特定の文脈のもとで出会った他者に対してしか作動しなくなる。例えば、友人の話に長時間聴き入って思わずもらい泣きすることがあっても、電車の中で見ず知らずの他人が泣いているのを見てももらい泣きすることはない。私たちの身体は、発達過程で、どのような他者との間で、どのような場面で間身体性を顕在化させるのか、選択的に反応するように変化を遂げている。私たちは間身体性の発露を全方位的なものから選択的なものに変えていくような仕方、成人の身体を獲得するのである。

障害者に対する差別的意識が社会の中に残存する限り、私たちの身体は発達過程で障害に対する微細な差別を身体に内在化させることになる(田中, 2022b)。このような身体にとっては、意識のうえでは差別する意図がまったくなかったとしても、障害のある身体と出会う際、円滑な相互行為の循環に入っていくことが困難になる。それは具体的には、表情の共鳴が生じにくくなったり、パーソナルスペースが不自然に広がったりすることに現れる。

先述した通り、円滑な相互行為の循環を妨げる身体性の不一致もまた、障害を理解する推進力になりうる。ただし、それは間身体性が顕在化してくるまで相互行為を循環するための何らかの「場」を必要としている。パラスポーツが障害理解に役立つ場面があるとすれば、まさにこのような場を提供してくれることにあるだろう。

この点で、ゴールボールをプレーする選手たちの姿はきわめて示唆的である。先に述べた通り、彼らは単に「視覚障害」を生きているわけではない。かすかに残存する「見る」能力を用いてボールを扱うスキルと、「見る」能力をすべて遮断して「聴く」能力に連動させてボールを扱うスキルを共に備え、試合の内外においてその両者を高度に使い分けるといったスキルを発揮している。ゴールボールというパラスポーツの場があることによって、選手たちはいわば部分的に「見える」世界と「見えない」世界とを往復する身体性を提示している。彼らの存在は、「見える」身体と「見えない」身体、視覚をめぐる健常者と障害者が共に同じ世界に参入しうることを示す強力な事例である。また、ゴールボールという競技は、「見える」身体と「見えない」身体とのあいだで間身体性が顕在化しうることを示す具体的な「場」の例にもなっている。

ゴールボールに限らず、多くのパラスポーツは障害者だけでなく健常者にも経験しうる。パラスポーツを観戦することや実際に参加することを通じて、多くの健常者もまた、障害を持つ身体とともに間身体的な共鳴を経験するだろう。このような経験の中にこそ、パラスポーツを通じた共生の本来の姿を期待できるように思われる。パラスポーツは、発達過程で選択的になってしまった間身体性の発露を再び全方位的なものに回復する可能性を持っているのである。

引用文献

- Baldwin, D. A., Baird, J. A., Saylor, M. M., & Clark, M. A. (2001). Infants parse dynamic action. *Child Development*, 72(3), 708-717.
- Descartes, R. (1637). *Discours de la méthode*. (三宅徳嘉・小池健男訳, 2010「方法序説」『デカルト著作集[1]』所収, 白水社.)
- Doherty, M. (2008). *Theory of mind: How children understand others' thoughts and feelings*. Psychology Press.
- Fuchs, T., & De Jaegher, H. (2009). Enactive intersubjectivity: Participatory sense-making and

- mutual incorporation. *Phenomenology and the Cognitive Sciences*, 8(4), 465-486.
- Gallagher, S. (2008). Direct perception in the intersubjective context. *Consciousness and Cognition*, 17(2), 535-543.
- Gallagher, S., & Zahavi, D. (2012). *The Phenomenological Mind* (Second edition) . Routledge.
- Goldman, A. I. (2008). *Simulating minds: The philosophy, psychology, and neuroscience of mindreading*. Oxford University Press.
- Husserl, E. (1950). *Cartesianische Meditationen und Pariser Vorträge*. Martinus Nijhoff. (浜渦辰二訳, 2001『デカルト的省察』岩波書店.)
- Meltzoff, A. N., and Moore, M. K. (1977). Imitation of facial and manual gestures by human neonates. *Science*, 198 (4312), 75-78.
- Merleau-Ponty, M. (1945). *Phénoménologie de la perception*. Gallimard. (中島盛夫訳, 2015『知覚の現象学』法政大学出版局.)
- Merleau-Ponty, M. (1960). Le philosophe et son ombre. In *Signes* (pp.259-295) . Gallimard.
- Paralympic Games. (2024). Goalball - Men' s & Women' s Gold Medal Games. Retrieved October 30, 2024, from <https://www.youtube.com/watch?v=iRrNVLZsF3Y>
- Simner, M. L. (1971). Newborn's response to the cry of another infant. *Developmental Psychology*, 5(1), 136-150.
- Tanaka, S. (2015). Intercorporeality as a theory of social cognition. *Theory & Psychology*, 25(4), 455-472.
- Tanaka, S. (2017) . Intercorporeality and aida: Developing an interaction theory of social cognition. *Theory & Psychology*, 27(3), 337-353.
- Warneken, F., & Tomasello, M. (2007). Helping and cooperation at 14 months of age. *Infancy*, 11, 271-294.
- 浅生鴨 (2018)『伴走者』講談社.
- 安部川直稔 (2021)「手と目の協調運動」『脳科学辞典』2024年10月30日取得,
<https://bsd.neuroinf.jp/wiki/%E6%89%8B%E3%81%A8%E7%9C%BC%E3%81%AE%E5%8D%94%E8%AA%BF%E9%81%8B%E5%8B%95>
- 漢字辞典オンライン (n. d.)「聞」「聴」2024年10月30日取得,
<https://kanji.jitenon.jp/>
- 木村敏感 (2005)『あいだ』筑摩書房.
- 河野哲也 (2006)『〈心〉はからだの外にある——「エコロジカルな私」の哲学』日本放送出版協会.
- 高井康行・山上明子・石川均 (2024)「Leber 遺伝性視神経症」『臨床神経』64(5), 326-332.
- 田中彰吾 (2017)『生きられた〈私〉をもとめて——意識・身体・他者』北大路書房.
- 田中彰吾 (2022 a)『自己と他者——身体性のパースペクティブから』東京大学出版会.
- 田中彰吾 (2022 b)「間身体性の観点から障害者スポーツを通じた「つながり」を考える」『スポーツ社会学研究』30(2), 53-64.
- 日本パラスポーツ協会 (2022)「ゴールボールの紹介」2024年10月30日取得,
https://www.youtube.com/watch?v=DtDEOQY_4Ng
- パラサポ WEB (n. d.)「ゴールボール」2024年10月30日取得,
<https://www.parasapo.tokyo/sports/goalball>
- ヘーゲレ, J. A. (2023)『視覚障がい者の身体運動科学——学際的研究』(中田英雄訳) 市村出版.
- 松尾俊彦 (2023)「網膜色素変性症」『岡山医学会雑誌』135 (3), 147-151.
- 鷺田清一 (2015)『「聴く」ことの手——臨床哲学試論』筑摩書房.

Promoting Social Understanding of Physical Disabilities through Parasports

TANAKA Shogo

(Tokai University)

This paper begins with a phenomenological description of the author's own experience of encountering Jun'ichi Kawai, a blind swimmer who won numerous medals in five Paralympic Games. Summarizing the experience as "resonance" through the auditory perception of voices, the author further describes his experience of watching blind sports at the 2024 Paralympic Games, taking up goalball as an example. The focus then moves to the players' sophisticated skills of auditory-motor coordination, which would have been differentiated from the visuo-motor coordination that most people depend on in their bodily movements. After describing these experiences, the paper explores the methodological question of understanding another person's lived experiences and their mental states. By introducing the notion of intercorporeality proposed by Maurice Merleau-Ponty, the author finds the most fundamental dimension of social understanding in sensory-motor resonance between two persons solicited by perceiving the bodily actions of one another. The deeper phase of mutual understanding emerges "in-between" through embodied interpersonal interactions, including both verbal and nonverbal communications. Understanding another person is not based primarily on cognitive operations such as inference and simulation but on resonant experiences that occur in-between, where the perception-action loop as well as inter-affectivity are formed between two persons. Finally, based on this methodological understanding, the paper prospects the possibility of promoting social understanding of physical disabilities through parasports.